



面布団を刺す作業。ミシン担当の職人はその作業だけを長い年月行ってきた者が多く、当然高い技術を持っている

前回触れたように今はピッチ刺しが人気だが、日本武道具製作所の自社ブランド商品には、ピッチ刺しのみならず、棒刺し、格子刺し、斜め格子刺しなど、さまざまな刺しのものがある。格子刺しは手刺風に糸を縦横に刺したのだが、高級品では2ミリという細かいピッチで縦横(格子)に刺すことによって、手刺しと変わらない質感に仕上がっている。

ミシンでの刺し方も長い歴史があり、その中で年々工夫が加えられ、進化していることに改めて気づかされる。

とはいえ、ミシンで刺した防具はやはり手刺しのものにはかなわないと考える読者もいるだろう。日本剣道具製作所では手刺しの剣道具も制作しているが、「手刺しは日本でできないので、海外で刺しだけは

日本でつくる 剣道具

— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第4回 職人はミシンを分解して組み立てられる

「川辺さんは明言する。もちろん、日本でできないというのは技術がないということではなく、

「一人の職人が防具一つ分刺すのに2カ月半ぐらいはかかります。その期間のその職人の給料と、材料費、経費を考えると200万円でも売りたいくない、というのが正直なところ。手刺しをしようとすると上級職人ですが、その人のほかの仕事がその間止まってしまふということですから」

と川辺さんは経済的な事情を説明する。一般的に市場で販売されている手刺しよりはるかに日本製ミシン刺しのほうがすぐれているのが現状だというが、「でも本当に剣道具を愛してくれる方には、手刺しでも喜んで日本で作らせていただきます」とも付け加えた。

何ミリという刺し幅は 職人の手の感覚で調整

工場の奥に足を進めていくと、たくさんミシンが並んでいる。どれも見るからに古いミシンだが、現在は面布団のように極厚のものを縫うことができるミシンは製造されておらず、長い歴史の中で自分たちで

改造を重ねてきた。古いけれども剣道具をつくるための最も進んだ設備といえる。

「もう30年も40年前のミシンですが、こういう機械も技術とともに成長してきたものです。これは世界でうちにはかないもの。職人さんたちが時代とともに、こうした方がいいと考えながら、自分たちで部品を探して改造してきています。だから職人たちは、故障したときもミシンを分解して組み立てる能力を持っています(川辺さん)」

面布団を一枚刺すのに40分から1時間かかるというが、面布団だけで1日20枚前後がこでつくられていて、そのほかに垂れなども同じくらいの数をこなす。

各小売店の仕様でつくる面は、それぞれに何ミリというピッチが違い、刺し方もさまざまなので、一枚一枚ミシンの設定を変えながら行なう必要がある。

「けれども、何ミリで刺すというのは規定があるわけではなく、すべて職人さんの手の感覚です。これが職人の技ですね(川辺さん)」

ミシンで面布団を刺していると、白い空気がわき上がってくる。刺すときの摩擦熱で蒸気が出るのだという。当然ながら、そ



案内人 川辺尚彦

(株)全日本武道具、(株)日本剣道具製作所代表取締役

撮影=窪田正仁



刺す糸も日本製。刺すときの熱や打突に耐えるものを、糸の業者と共同で開発した

の熱に耐えられる糸を使う必要がある。「この糸も国産糸ですけど、自分たちで糸の業者の方々と協力して、熱でも切れないう糸を開発しました。普通の糸だったら熱で簡単に切れてしまいます。それに面を何度も打たれても切れない糸でなければなりません。この糸ひとつにも歴史があるんです(川辺さん)」



縦に刺していく。何ミリというピッチの調整は職人の感覚による

刺しを行なう前に、前号で芯材を詰めたる布団を、一箇所だけ縦に赤い糸で縫っておく



さらにローラーをくぐらせ、芯材の座り具合を整える



一方向に端から端まで刺したら、裏返して刺す。一本の糸ですと刺していくが、海外製だと二回ここに糸を切ってしまうようなものもあるという



それぞれの仕様に応じて、ミシンをセッティング



作業が進んだ状態。職人は手慣れた様子で作業をしているが、かなりの集中力と根気を要する仕事と思われる



ミシンは長い年月をかけて剣道具専用に改造されてきている



この面布団の場合、横方向にも刺す仕様なので、仕上がりにまで1時間ほどかかるそうです



刺しの作業開始

